

二〇一三年六月一九日（川西郷土館参加者一七名）

趣をたがへ庭石梅雨に濡る
 小祠の母屋に向きて坪涼し
 蛇の目傘借りて愉しき梅雨の宿
 端居して風にまどろむ旅二日
 古時計鳴る梅雨暗き異人館
 旅荷解く気になるまでの端居かな
 風通ふこの縁涼し推敲す
 ぴかぴかの広縁に映ゆ緑かな
 鎖されたる土蔵の鉄扉梅雨湿り
 樋落つる水の音きく緑雨かな
 坪庭を要としたる廊涼し
 土間涼し二つ並びておくどさん
 暮れなづむ里山栗の花あかり
 中の間のランプの古色葎戸透く
 襖絵の吉祥天女衣涼し
 庭石の古りたるままに苔の花
 緑蔭のアトリ工空の香に満てる
 庭石の音なく濡れて時雨けり
 出格子の軒にさ揺らぐ釣忍

小袖
 " "
 " "
 なつき
 " "
 " "
 きづな
 " "
 " "
 せいじ
 " "
 菜々
 " "
 はく子
 " "
 " "
 つくし
 ぼんこ
 満天
 よし子
 うつぎ

廊涼し鶯張りの音もまた
 青しぐれ旧家の甕洗ひけり
 二〇一三年六月一九日（能勢温泉参加者一七名）

千枚田形さまざま風涼し
 川沿ひに数珠なす駐車螢狩
 をちこちの鳥語聞きつつ避暑散歩
 湧きいづる如竹林に螢舞ふ
 たかむらにいよよ佳境や螢の火
 バスの窓右に左に螢沢
 恋螢闇深まれば高く舞ひ
 小夜更けて葦間に点る螢かな
 明易や鳥語に覚むる旅の宿
 高みまで命燃やさん恋螢
 つと吾に寄り来るはぐれ螢かな
 葦叢の螢浄土を愛でにけり
 谷戸暮れてをちこちともる螢かな
 漆黒の川筋たどる螢狩
 先駆けの螢火一つ草叢に
 梅雨湿りかわたれ時の風ことに
 螢火の点滅の息揃ひけり

こすもす
 " "
 " "
 " "
 " "
 菜々
 " "
 " "
 " "
 " "
 はく子
 " "
 " "
 " "
 せいじ
 " "
 " "
 ぼんこ
 " "

廃屋となりしかや葺き苔の花 こそす
 道のべの仏に夏の日射しかな 小 袖
 螢火のまたたきみたる闇深し ともえ
 千枚の棚田見おろす畦涼し なつき
 通ひ来る谷戸の棚田の風涼し ひかり
 里山路夜目に浮き立つ栗の花 うつぎ
 茅葺きの片屋根のぞく緑かな "

二〇一三年六月一八日(清普寺・野間石仏参加者一七名)

雨垂れの跡にはあらず蟻地獄 せいじ
 万緑の谷戸をつづりてバスの旅 "
 栗の花谷戸の一村埋めけり "
 大櫛千手をかざす青葉かな わかば
 農具小屋すっぽり包む凌霄花 "
 里山の裾といふ裾栗の花 "
 梅雨兆す旅の鞆は高低に きづな
 坂がかかるここより能勢路栗の花 "
 近づくは人影ばかり蟻地獄 小 袖
 千手の枝かざすは神の大夏木 "
 修行堂のぞけば豊徴匂ふ つくし
 里路なる六体地蔵蟻のぼる "

菖蒲池傘下に抱く大けやき なつき
 護摩焚きの跡うろろす瑠璃とかけ "
 老鶯や局の墓碑に額づけば 菜 々
 落し文ひるふ帝の陵に "
 豪族の墓供花もなく灼けにけり 満 天
 老鶯や天皇稜に銜して "
 堂縁を借りて一服風涼し よし子
 力石試す人なく灼けにけり "
 早田の亀甲模様広げけり 雅 流
 幼帝の杜寧かれとさへずりぬ こそす
 里山をおほい尽くして栗の花 ともえ
 畦道の茅花に谷戸の風渡る ひかり
 まなかひに陵見ゆる丘涼し 有 香
 神の木をハレムとしたる青葉木菟 百 合
 吟行子つばなながしに足軽し よう子

二〇一三年六月一九日(川西郷土館参加者一七名)
 吟行句会みの選